

2024年5月21日

バルカーで17%のCO2削減確認 到着時間最適化のブルー・ヴィスビー

デジタル技術を活用して船舶の目的地到着時間を最適化することで、船舶の温室効果ガス（GHG）排出削減を目指すブルー・ヴィスビー・コンソーシアムは3月から4月にかけてトライアル航海をバルカー2隻で実施した。14ノットの船速を前提とすると、1隻は28.2%、もう1隻は12.9%、平均17.3%の二酸化炭素（CO2）削減効果が確認された。

昨年のパイロット・プログラムに続いて今回、プロトタイプ・トライアルが行われ、その結果が17日に公表された。今回トライアルで用いられたのは“Gerdt Oldendorff”と“Begonia”のバルカー2隻で、コンソーシアムに参加する穀物生産者協同組合CBHグループの用船の下、同グループの豪州のクウィナナ・グレーン・ターミナルへバラスト航海を実施した。“Gerdt Oldendorff”はトライアルでは12ノットの船速に対して7.9%のCO2削減となったため、船速14ノットとすると28.2%の削減が可能という。ブルー・ヴィスビーのソフトウェア、技術や運航のシステム、利益分配メカニズムなどもテストされた。

今後数カ月のうちにより広範な参加者によるプロトタイプ・トライアルを実施することも計画している。

2022年に発足したブルー・ヴィスビー・コンソーシアムは、船舶の性能や海象、港湾の混雑状況などのデータを統合し、同じ港を目指す船舶群の到着時間の最適化・分散を行うことで、船舶から排出されるGHGの削減を目指している。そのための統合プラットフォーム「Blue Visby Solution」の開発を進めている。コンソーシアムには日本から丸紅、商船三井、日本海事協会（NK）、日本政策投資銀行が参加。NK子会社のNAPAと国際弁護士事務所のステイブンソン・ハーウッドが共同で運営している。

海事プレスに掲載の記事・写真等の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約に
© Kaiji Press Co., Ltd. All rights reserved.
No reproduction or republication without written permission.

サイトの利便性向上
や広告配信などのため
端末情報等を利用
しています。詳しく
は「個人情報保護方
針」をご覧ください。